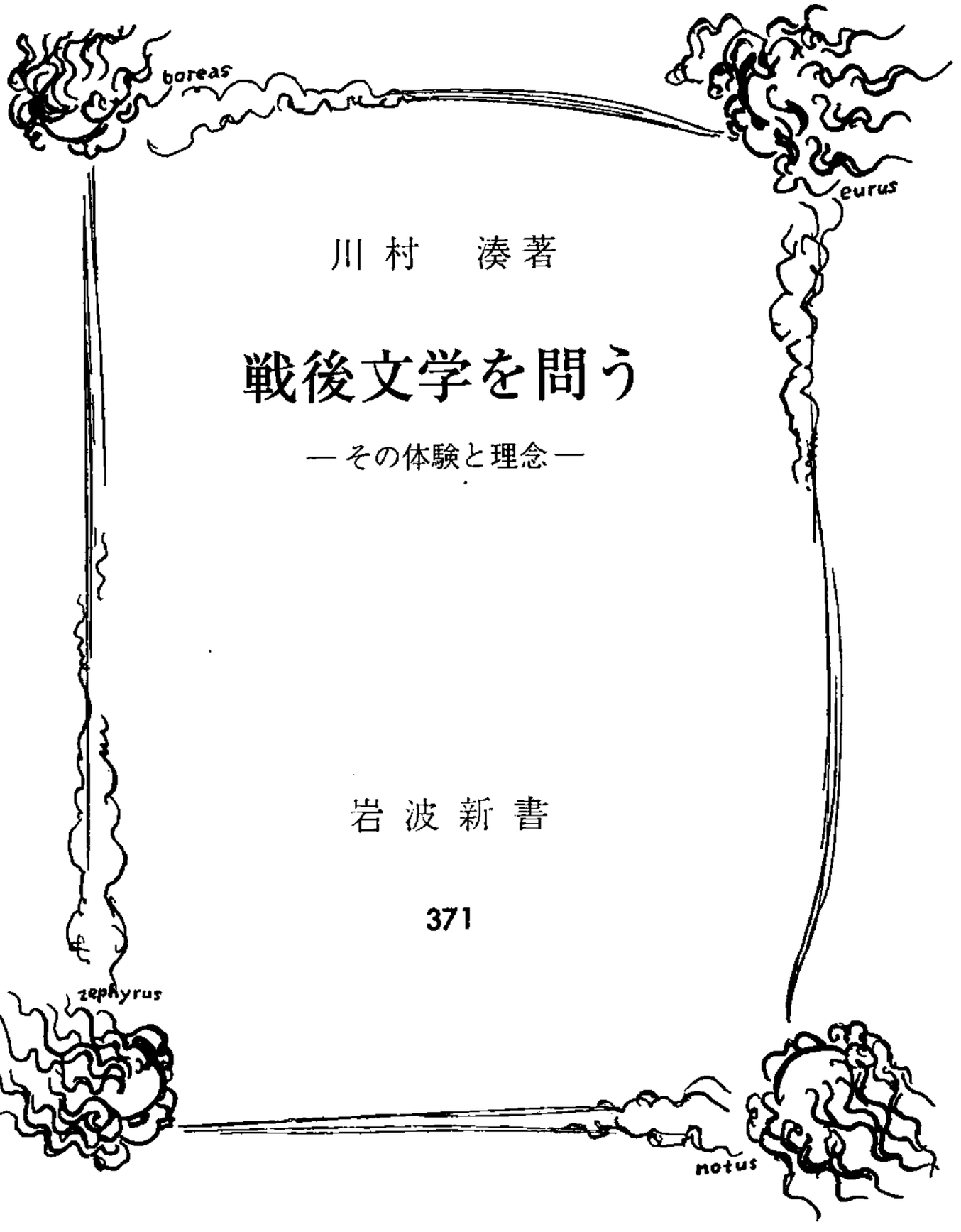
川村 湊著

戦後文学を問う

―その体験と理念―

岩波新書

371



川村　湊著

戦後文学を問う

―その体験と理念―

岩波新書

371

川村　湊

1951年北海道生まれ
法政大学卒業
文芸評論家，法政大学教授
著書—「異郷の昭和文学」(岩波新書)
「アジアという鏡」(思潮社)
「南洋・樺太の日本文学」(筑摩書房)
「海を渡った日本語」(青土社)

�end後文学を問う

定価はカバーに表示してあります　岩波新書(新赤版)371

1995年1月20日　第1刷発行

著　者　川村　湊（かわむら　みなと）

発行者　安江良介

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・三陽社　カバー・半七印刷　製本・永井製本

© Minato Kawamura 1995
ISBN4-00-430371-0　Printed in Japan

目　次

序章　「戦争」が終わった……1
Ⅰ章　初めての海外旅行……13
Ⅱ章　放散するエネルギー——六〇年安保と文学……35
Ⅲ章　一九六〇年の雛祭り……55
Ⅳ章　ベトナムを見る眼……81
Ⅴ章　〈性〉の冒険者たち……99
Ⅵ章　関係としての〈性〉……119

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbook.com

Ⅶ章　クルマの中の闇 …… 139
Ⅷ章　「家」が流れる …… 157
Ⅸ章　普遍化する〈アメリカ〉 …… 175
Ⅹ章　「在日する者」の文学 …… 197
終章　「戦後文学」が終わった …… 219

作家一覧

序章　「戦争」が終わった

帰還

日本の戦後文学は、「帰る」ことから始まった。「兵隊さんたちが大陸や南方から復員してかえってくるのを、見た人は多いと思います。みな疲れて、やせて、元気もなくて、いかにも気の毒な様子です。中には病人になって、蠟のような顔色をして、担架にかつがれている人もあります」。

竹山道雄の『ビルマの竪琴』（『赤とんぼ』一九四七年三月号〜四八年一月号）の書き出しの部分である。日本へ帰ってくること、シベリア、中国、東南アジア、太平洋の戦場へと出征していった兵士たちは、敗戦後、まず日本へ「帰る」ことを考えざるをえなかった。船で、汽車で、車で、そして徒歩で。もちろん、戦場や後方にいた兵士たちだけが帰ろうとしたのではない。「大東亜共栄圏」と呼ばれていた日本の植民地、占領地に住みついていた人たち、訪れていた人たち、そこで生まれ育った人たちも、日本人として「日本」の四つの島（北海道、本州、四国、

九州）へ帰還することをまっ先に考えなければならなかったのである。

「僕は樺太（からふと）へ母を捨ててきた。母の死体を、と言うべきかも知れない。僕は母の死顔をまだ覚えている」というのは、吉田知子の「豊原」（『ゴム』一九六七年一月）という短篇小説の冒頭である。この小説は、日本の領土だった「樺太（サハリン）」の豊原市（現ユジノサハリンスク）に母一人子一人で住んでいた十四歳の〈僕〉が、引き揚げの日に、寝床で冷たくなった母親を見つけ、その死体をそのままにして、引き揚げ船の出航する大泊（おおどまり）（現コルサコフ）の収容所へと出かけるのである。

もちろん、海外の戦場や植民地、あるいは占領地から引き揚げてくることだけが「帰る」のではなかった。徴兵された軍隊から、動員された軍需工場から、疎開した田舎の共同宿舎から、大人たちも子供たちも、男も女も自分たちがもといた町、もといた場所、もといた家にそれぞれ「帰り」つこうとしていたのである。

「風景が涙の中で、歪みながら分裂した。私は歯を食いしばり、こみあげて来る嗚咽を押えながら歩いた。頭の中に色んなものが入り乱れて、何が何だかはっきり判らなかった。悲しいのか、それも判らなかった。ただ涙だけが、次から次へ、瞼にあふれた。掌で顔をおおい、私はよろめきながら、坂道を一歩一歩下って行った」。

これは桜島の部隊で暗号員として勤務していた〈私〉が、一九四五年八月十五日の「終戦の御詔勅」に接した際の心的風景を描いた梅崎春生の短篇小説「桜島」(『素直』一九四六年九月)の最後の文章である。死を覚悟し、それを目前にしながら、不意に生の世界へ投げ戻された体験。それはもう永久に失ってしまったと思っていた何気ない日常生活への帰還ということなのだ。梅崎春生の処女作「風宴」(『早稲田文学』一九三九年八月号)に描かれたような、何もなすべきことをせず、怠惰なままに日を送る学生生活。しかし、怠惰であり、自堕落であることの日常的な繰り返しを許されないのが、非常時としての戦争だったのである。涙をこぼしながら坂道を〈私〉が下りてゆく先は、戦争によって中断されたそうした〈私〉の青春なのであり、昨日から今日へ、今日から明日へと続く、平常時の世界にほかならないのである。

死者たち

だが、もちろん、すべての人が戦争から平和の世界へと「帰り」つけたわけではない。病人であれケガ人であれ、帰りつくことのできた人はまだ幸運だったというべきだろう。さまざまな理由と要因によって、多くの人はふたたび日本、あるいは故郷の町や村、そしてある日出ていった家に再び戻ることはなかった。一九三七年(昭和一二年)七月から四五年(昭和二〇年)八月

までの約八年間、戦争での死者は軍人・軍属約二百三十万人、民間人約八十万人といわれる。このうち海外での死者は軍人・軍属約二百十万人、民間人約三十万人と推定されている。あわせて約三百十万人が、戦争前の日常の生活へと帰還することができなかった。この数字は過少であることはあっても、過大であることはない(『戦後史大事典』一九九一年、三省堂)。

おーい、みんな、
伊藤、真藤、荒井、厨川、市木、平山、それからもう一人の伊藤、
そのほか名前を忘れてしまったが、サンホセで死んだ仲間達、
西矢中隊長殿、井上小隊長殿、小笠原軍曹殿、野辺軍曹殿、
練習船「銀河丸」が、みんなの骨を集めに、今日東京を出たことを報告します。
あれから十三年経った今日でも、桟橋で泣いていた女達がいたことを報告します。

大岡昇平が生まれて初めて書いたという「詩のようなもの」は、フィリピンのミンドロ島で死んだ戦友たちに、遺骨収集の船が出かけるという呼びかけだった(「ミンドロ島ふたたび」『海』一九六九年八月号)。ともに帰ることのかなわなかった戦友たちの名前を脳裏に甦らせた時、戦

後文学有数の散文家であった大岡昇平も、感情のつきあげてくるままにそれらの人名を呼び続けることしかできなかったのである。帰ってきた者と帰らなかった者たち。戦後がそうした二項対立の図式によって始まったことを戦後文学は記憶している。運と不運。そうとしかいいようのない二分法が、生者と死者とを分け隔てる原理にほかならなかったのである。

たどりつけない「日本」

むろん、死者だけではない。生者もまた「帰る」べき家や目標を失い、孤児となり、寡婦となり、浮浪者となり、〝尋ね人〟となって戦後の混乱や〝ヤミ〟の世界へと姿を隠した例も少なくないと思われるのだ。安部公房の『けものたちは故郷をめざす』(『群像』一九五七年一月号～四月号)の主人公の〈久木久三〉は、小説の最後の場面でこんな独白をもらしている。

……ちくしょう、まるで同じところを、ぐるぐるまわっているみたいだな……いくら行っても、一歩も荒野から抜けだせない……もしかすると、日本なんて、どこにもないのかもしれないな……おれが歩くと、荒野も一緒に歩きだす。日本はどんどん逃げていってしまうのだ……一瞬、火花のような夢をみた。ずっと幼いころの、巴哈林(バハリン)の夢だった。高い

试读结束：需要全本请在线购买：　www.ertongbook.com

塀の向うで、母親が洗濯をしている。彼はそのそばにしゃがんで、タライのあぶくを、次々と指でつぶして遊んでいるのだった。つぶしても、つぶしても、無数の空と太陽が、金色に輝きながらくるくるまわっている。そしてその光景を、塀ごしに、もう一人の疲れはてた彼が、おずおずとのぞきこんでいるのだ。どうしてもその塀をこえることができないまま……こうしておれは一生、塀の外ばかりをうろついていなければならないのだろうか？

帰りたくても、帰ることができない。それは帰りつくべき「日本」という場所が失われてしまったからだ。安部公房の『けものたちは故郷をめざす』の主人公は、敗戦後の「満洲(現中国東北部)」から孤児となって日本という故郷へ向かって、動物的な本能のように南へとめざす困難な旅を続ける。しかし、日本をすぐ目の前にしながら、彼は日本にたどりつくことができない。それはまさに「おれが歩けば」、それにあわせて「日本」が「どんどん逃げていってしまう」ような気持ちを抱かせるものなのだ。

「日本」に帰りつかないというモチーフ。あるいは帰りついたとしても、そこは故郷をめざして困難な旅を続けていた時の「荒野」と変わりのないものだったという失望感と絶望感。安部公房の初期の小説の深層には、戦争からの逃避と、崩壊した植民地からの故郷への帰還とい

う二つのモチーフがひそんでいる。洗濯をしている母親のそばで、あぶくをつぶして遊んでいる幼少年時の自分を見ている自分とは、「帰る」ことのできなかった死者としての復員兵であり、引き揚げの途中で不運にも望郷の鬼となった引き揚げ者の亡霊であるといってもよいだろう。安部公房は、いわば戦後の復興や、高度経済成長という日本の戦後社会の変化を、いわば〝塀の外〟から眺めている人物を自分の小説の主人公としつづけていたのである。

廃都の獣

必死になって帰りつこうとしたのに、そこはもはや帰りつくべき故郷でも日本でもなかった。戦後は安部公房の主人公にとってそんな失意や失望をもたらすものとしてあったのだが、また、同時に「帰り」ついた日本をいわば極限まで肯定しようという精神も生まれてこずにはいなかった。田村泰次郎の「肉体の門」(『群像』一九四七年三月号)は、復員兵の〈伊吹新太郎〉をめぐる〝夜の女〟たちの抗争の物語だが、彼女たちは〝ボルネオ・マヤ〟とか〝関東小政〟とか、地名を入れた渾名(あだな)で呼ばれていた。「マヤはボルネオへ行ったことはない。マヤの兄がボルネオで戦死したのだ。それ以来彼女はボルネオのことばかり話すので、こんな名前がついた。眼が大きく、小肥りで、色が浅黒いことも、この名前をひきたてた」と作中には渾名の由来が記さ

れている。

当時南洋の未開の地、暗黒の島と思われていた地名を自分の呼び名としていたことは面白い現象だといえるだろう。「肉体の門」の登場人物の〈伊吹〉も、〈ボルネオ・マヤ〉も、戦争という場所から敗戦の日本に「帰り着いた」若い男女であり、焼け跡の瓦礫と闇市の「日本」において、家も家族も失ってしまった彼らには、自分の「肉体」にしか帰るべき基点はなかったのである。

法律も、世間のひとのいう道徳もない。そんなものは、日本がまだ負けないとき、彼女たちが軍需工場のなかで汗と機械油にまみれているときを最後に、爆弾と一緒に、——そして彼女たちの家や肉親と一緒に、どっかへふっとんでしまった。なんにもなくなって、彼女たちは獣にかえったのだ。まったく、彼女たちは廃都の獣である。彼女たちは地下の洞窟で眠り、喰らい、野天でまじわる。そのまだ青い巴旦杏（はたんきょう）のような肉体は、なにものをも恐れない。

彼らに残ったのは、「獣にかえ」る道だったのであり、その「青い巴旦杏のような肉体」だ

けだったのである。戦争直後の文学において「肉体」が語られ、「堕落」や「生の本能」が語られたのは、家も肉親も国家も失ってしまった人間たちに残ったのが、ただ一つがむしゃらに生きようとする「獣」のような生存本能、肉体の欲求にほかならなかったからだ。もちろん、それは戦時中にかまびすしく語られていた「死の美学」や「散華の精神」に対する、健康で自然なアンチ・テーゼであったことも間違いない。死の淵からの帰還。戦後文学はそうした死や絶望や破壊から「帰る」ことから始まったのだが、その帰り着いた「日本」は、まさに廃都の光景を呈していたのである。

戦後文学の始まり

帰りついた人々は、しかしそうした廃都の現実、焼け跡や闇市の現場から新しい「家」と「社会」とを作り上げてゆかなければならなかった。絶望している暇も、悲嘆や感傷に耽っているゆとりもなかったのである。

「ああ、その時です。背後の兵舎のほうから、誰やら金槌で釘を打つ音が、幽かに、トカトントンと聞えました。それを聞いたとたんに眼から鱗が落ちるとはあんな時の感じを言うのでしょうか、悲壮も厳粛も一瞬のうちに消え、私は憑きものから離れたように、きょろりとなり、

なんともどうにも白々しい気持で、夏の真昼の砂原を眺め見渡し、私には如何なる感慨も、何も一つも有りませんでした」と、戦後の社会において〝トカトントン〟と、建築の金槌の音、建設の槌音が絶え間なく聞こえていることを、太宰治は軽妙な短篇小説「トカトントン」(『群像』一九四七年一月号)の中で書いている。真面目ぶったり、深刻がったり、悲壮ぶったりすると、とたんに聞こえてくるトカトントンの音。それは人間が生きていく現実の卑小な「生活」へと回帰させる音なのであり、いわばもっとも底辺での「獣」のような生存や生活への卑俗な欲求の象徴にほかならないのである。

焼け跡にはバラック建ての小屋が建てられ、人々はようやく動き出した汽車に乗り、食料や衣類や商品を求めて右往左往した。「肉体」や「生活」に帰りつくとはそういうことであり、そこから「戦後」のすべての物質的な文化、精神的な価値観は再出発したのである。だが、バラック建てや木造の平屋建てながらも、ようやく雨露をしのぐ「家」ができ、三度の食事がまがりなりにも整えられるようになって、人々はようやく自分たちがどんな「戦後」の社会へ帰りついたかという疑問を、念頭に浮かべるようになったのである。自分たちはどこへ帰りついたのか？　あるいは帰りつかなかったのか？　戦後文学が本当に始まったのは、そこからである。敗戦直後の混沌と無秩序という〝祝祭的空間〟は、もはや通り過ぎてしまった。〝第二の

青春〟と浮かれ騒いでいた〝遅れてきた〟青年たちも、興奮が去ってしまえば、急に、自分たちのまわりにキナ臭い匂いの煙が漂っていることに気がつかざるをえなかった。

「むかし、世界中が戦争をしていた頃のお話なのですが」と島尾敏雄の「島の果て」（『VIKING』一九四八年第四号）は書き出されている。この小説が書かれたのは一九四五年九月のことで、「戦争」が終ってから一か月もたたないうちに、「むかし」の戦争の話として、特攻隊の隊長さんと島の娘〈トエ〉との童話めいた恋物語は書かれたのだ。隊長の〈朔中尉〉は特攻兵器に乗って、いずれ〝死に〟に行かなければならない。それは超自然の妖怪や天災の災厄のように決定づけられていることなのだ。「戦争」が終った直後に、戦争の話を「むかし話」として語ろうとした島尾敏雄は、戦争がまた踵（きびす）を接してやって来ることを予感していたのかもしれない。それはカゲロウ島（モデルとなったのは奄美の加計呂麻（かけろま）島）の山際の崖にひそんでいる毒へびやガジマルの下のケンムン（化け物）や沖の亡霊（もうれ）のように、無邪気な島の娘〈トエ〉たちに襲いかかってくる災厄なのである。

「あそこを見給え。決して孤独でも孤立でもない。君の云うようにたしかに人々の心の底には一抹の疑いとともに孤立感、孤独感が根本的には存在しよう。しかし、気持の如何

试读结束：需要全本请在线购买：　www.ertongbook.com